



働く悩みについてインターネット検索をする人が増え、

**働く自信や誇り**が持てず、実際に仕事にもつけ

なくなってしまうくらいの悩み、苦しみを抱える切実な声は、

あふれています…

昨年末大阪で、20代前半の「自称ニート」の男性と縁あって話していました。聞けば誰でも名前を知っている全国屈指の関西にある有名国立大学を卒業、これまた有名な大手銀行に勤めたのですが辞職、しばらく、自宅で毎日を悶々と過ごしていたというのです。

お釈迦様の教えによって、毎日自信と誇りを持って生きてゆく道を知らされた彼は、多くの「ニート」に、ぜひ知ってもらいたいと、その思いを、2枚のA4サイズのレポートに、まとめてくれたのです。

モノが欲しいとかお金が欲しいとか出世したいとか、そんな理由で自分の人生を消費することができる人を、うらやましいとすら思う。

仕事の意味なんて、そんなこと考えても

しょうがないと言われてもそれが気になってしょうがない。

自分なりに納得のいく何かがないと動きたくない。

何かの行動を起こしたい、しかし、先を想像して

幸せになれそうな気配がしないから、

今日も部屋で寝るしかない

そして、ネット上に溢れる声、声、声、……

や

る気があまり出ないのでよく考えてみたんです。

働くことについて。

なぜ私は自分を成長させるのか？

なぜ辛い思いしてまで何かを得るのか？

怒られて、苦しんで。それを乗り越えれば何かを得られる。

でもそんなに苦しんで得る必要があるのか？

それは自分を成長させるため。

ではなぜ自分を成長させるのか？

それは今自分が半人前だから

なぜ一人前になる必要があるのか？



**現**在、就職活動を終え、  
来年の4月から社会に出る者です。  
働く目的は何ですか？

就職活動中に面接で質問されて、  
最初、答える事に窮してしまった質問でした。

それからあれやこれやと真面目に  
考えてみたのですが、

どうも自分でしっくりきていません。

結局、「お金をかせいで、食っていく為」

なんじゃないだろうかとは思います。

もう少し言えば「よりよく生きて行くために」

働くと言うことでしょうか？

やっぱりしっくりきません。

結局、人生観を問われていたのだらうと思いますが、

みなさんの働く目的は何でしょうか？



一  
一

一ト予備軍の23歳の息子を持つ父親です。今後の進路について、来年大学を卒業し働くものと思っておりました。しかし就活が思うように行かず内定は出ておりません。今は自信を喪失し自暴自棄気味で毎日 PC でゲームをする以外は何もしてません。自分でも情けないと言っております。また、家を出たいとも漏らしていますが、働く目処もなく資金すら持っていません。理由もこのまま家にいるとニートになってしまう、という危機感があるから、と言います。今後のことについて話し合いをしようとしていますが、自分の意見をほとんど言わずずっとだまって聞いているだけです。息子に親としてどのように接すればいいのでしょうか？



**派**遣会社に入って半年たちますが、2件もはずされてしまいました。2件目はもうこのような事が無いようにと、必死でがんばろうとしましたが、いくつも

注意は受け改善するように努力しましたが、周りからは認められず、はずされる事になってしまいました。

派遣元でも強いクレームが飛び立ち、自分の発展が見えないと言われ、荷物をまとめて帰される可能性も出てきました。自分は努力しているのに認められないということは、またほかの会社へ行っても同じことでしょう。

ならば、それは「何もかもしても君は無駄だ」を指すことでもあり、生きるのも無駄という事を指しているように感じてきました。最近駅のホームからよく線路をのぞくようにもなりました。もう、頭がおかしいのでしょうか？ならばもうここで幕を閉じようと思います。でも幕を閉じるのは怖いです。どうか、普通の人間になれる方法や、現在の状態から救う方法やアドバイスがありましたら教えてください。私はもう怖いです！



こんな人を、「やる気がない人」「無気力のない人」「社会不適合者」と片付けてしまうのは、簡単でしょう・・・

# 自分の仕事を愛し、 熱中するようにしよう・・・

とは言われますが・・・



90年代はじめ、バブル経済が崩壊したあたりから、若者の失業が増え始めました。

「イヤなことがあれば、すぐ仕事をやめてしまう」

「こらえ性がない」「ちょっと叱ったら来なくなった」

「最近の若いやつはなっていない」



多くの方がそんな問題意識を持ち始めていた頃、事件は起きました・・・

さあゲームの始まりです

愚鈍な警察諸君

ボクを止めてみたまえ

ボクは殺しが愉快でたまらない

人の死が見たくて見たくてしょうがない

汚い野菜共には死の制裁を

積年の大怨に流血の裁きを

学校殺死の酒鬼薔薇

## 平成9年6月28日、「少年 A」逮捕。

数ヶ月にわたり、複数の小学生が殺傷された神戸連続児童殺傷事件が決着しました。

当時マスコミが報じていた、がっちり体型の30～40代の推定犯人像と全く異なる14歳の中学生であった少年 A。

しかも、いわゆる「普通の中学生」が起こした事件に、大きな衝撃が与えられました。

## 事件が起きたのは、5月27日早朝。

神戸市須磨区の中学校正門に、切断された男児の頭部が放置されているのを通行人が発見し、警察に通報。被害にあったのは、3日前から行方不明であった近隣マンションの11歳の男の子。

その口には、上記の犯行声明文が挟まれていました。

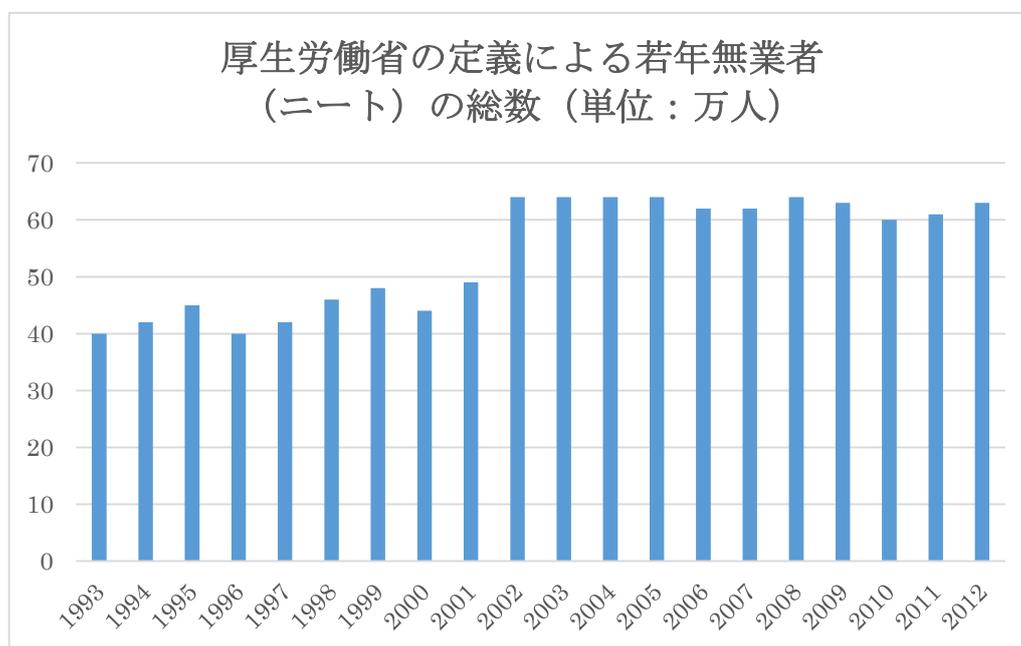
そして6月4日、犯人から第2の犯行声明文が神戸新聞社に郵送されました。

表の紙に書いた文字は、暗号でも、謎かけでも当て字でもない。嘘偽りないボクの本名である。ボクが存在した瞬間からその名がついており、やりたいこともちゃんと決まっていた。しかし悲しいことにぼくには国籍がない。今までに自分の名で人から呼ばれたこともない。もしボクが生まれた時からボクのままであれば、わざわざ切断した頭部を中学校の正門に放置するなどという行動はとらないであろうやろうと思えば誰にも気づかれずにひっそりと殺人を楽しむ事もできたのである。ボクがわざわざ世間の注目を集めたのは、今までも、そしてこれからも透明な存在であり続けるボクを、せめてあなた達の空想の中でだけでも実在の人間として認めて頂きたいのである。

少年 A は、この第2の犯行声明文の中で、自らを「**透明な存在**」と呼び、話題になりました。

兵庫県はこの対策に本格的に乗り出し、様々な議論の結果、県内すべての中学において、中学生の「心の問題」を対策すべく「トライやる・ウィーク」という取り組みを翌年、平成10年から開始したのです。

そして、阪神大震災の傷跡癒えやらぬ兵庫県に衝撃の事件が起きる中、若者の労働問題として、この後、にわかに世間でとりあげられるようになったのが、いわゆる「ニート」問題でした。

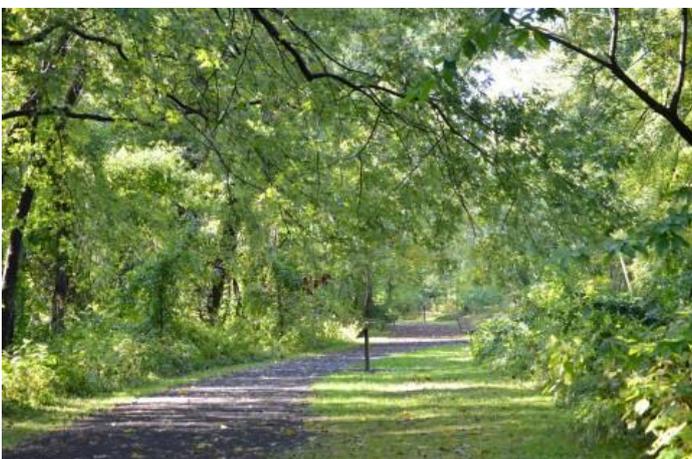


事件のおきた平成9(1997)年前後から「ニート」は増加しており、その後の若年層の人口の減少にもかかわらず、増え続けているのが実態なのです。

「ニート」の語源は、平成11年、イギリスの政府機関で作成されたある調査報告書の中の not in education, employment or training (教育、雇用、職業訓練に参加していない)の頭文字を取ったもの(NEET)です。

いわゆる、「働かないことを選択した人たち」が増えてきたのです。

『ニート—フリーターでもなく失業者でもなく』(幻冬舎、2004年)で「ニート」(若年無業者)という用語が話題となり、これ以降、この問題を浮き彫りにした“第一人者”として、メディア・講演などに出演されているのが、この本の著者である玄田有史さん(東京大学教授)です。



「お金はいらないんです。そんなに物欲がないんですよ。それよりも精神的に満たされたい。親の元において、衣食住が足りているという恵まれた環境のなかにいるから、言えることではあるんですけど」

「たとえば父が入院したり、母が亡くなっても、貯金もあるし、親戚もいます。いざとなったら働きます。そのときは仕事を選ばないですよ」

「納得したいですね。ちっちゃなことでもいいから、納得したいですね。こういう人と働きたいとか、こういうことをめざしている人と働きたいとか。贅沢ですね。贅沢に生まれちゃったと思いますね」

(『ニート』玄田有史、曲沼美恵,2004)



ある意味、「ニート」であることを選択できるのは、生きてゆけるという保証があるからです。そういう意味では、とても贅沢な選択肢とも言えるかもしれません。

実際「ニート」の7割が、家族や親族の給与、収入によって生活しているとも言われます。

そして、「ニート」が働かないことを選択した最も多い理由は、「人づきあいなど会社生活をうまくやっけていける自信がない」から。

つまり、「ニート」の目の前に立ちはだかる問題は、自分自身の適性や能力がわからないなどといった情報不足というよりも、人間関係にあり、「働く自分に対する自信の欠如である」という実態が見えてきます。

そして、「ニート」の孤立した人間関係は、多くが高校以前の人間関係から続いています。

「ニート」で、在学中に心を開いて話をできる友達が少なかった、もしくはいない人は、8割以上というデータもあります。



子供ではないけれども、かといって大人というのは、戸惑いを覚える10第前半。無邪気に夢みていた将来が自分のチカラではどうしようもないと知るこの頃は、多くの若者が「やりたいことがない」「つまらない」という意識を感じはじめるときでもある。ニートには、そんな10第前半に感じた虚しさや、やるせない感覚が、いつまでも残り続けている。

.....

ニート、そしてニートになりそうな人たちが本当に必要としているのは、職業についての知識や情報ではない。むしろ、自分が人と交わっている実感であり、交わることの緊張とそのなかでの楽しさだ。

(『ニート』玄田有史、曲沼美恵)

「ニート」問題研究の第一人者である玄田さんは、平成10年に兵庫県で始まった「トライやる・ウィーク」に大変注目しています。少年 A と同じ、14歳前後の中学2年生全員が対象となり、5日間の職業体験を行うという、全県あげての大規模な取り組みです。

5日間は決して短い時間ではありません。その間、学校を離れ、彼らは何を感じ、何を学び取っているのでしょうか。

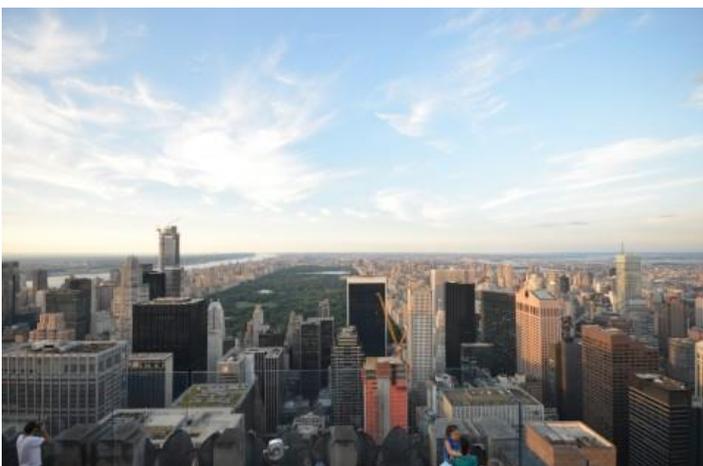
その前にご紹介したい1つの話があります・・・

全米の刑務所の再犯率は、平均5割と言われます。その中、再犯ゼロという驚くべき記録を出した施設がテレビやブログで取り上げられ、話題になりました。

実はその施設では、全米で150以上もの刑務所で導入されている、捨て犬の飼育を通じて受刑者の更生を促すドッグ・プログラムが行われていたのです。

虐待や災害、家庭の事情など、様々な理由により居場所を失い、保護センターに収容されるたくさんの犬。彼らは、新しい飼い主が見つからなければ殺処分されるのです。

このプログラムでは、そんな犬を、服役中の受刑者が一定期間預かり、社会に順応できるよう、刑務所内でトレーニングするものです。



なぜ、このプログラムによって、再犯率が0になるような効果が現れるのでしょうか。

**ギ**ャングの一員だった一人は、「犬は話し相手になるし一緒にいると落ち着くんだ。友だちや恋人がそばにいてくれるそんな感じだね。今は救われているよ、時間を忘れるくらいだ。自分が頑張ってハンターを訓練して、いい家族に引き取られていく事がハンターへの恩返しになるって思うんだ」こう語り、伏せが出来るようになったハンターにとっても喜び、犬に語りかけます。「大変だったろう。いい子だ」「最初の頃なんて、全然いうことを聞いてくれなかったのにね。犬から辛抱強さを学んだよ。自分を変えてくれたんだ。人生は一人で生きているんじゃないと教えられたな。これからの人生を悲観しなくなったというか、今は生きる希望が生まれたよ」。



3年で11頭もの犬を立派に育て上げ、新しい家族のもとへ送り届けたベテランの若者は、高校時代は学校へも行かず荒れた生活を送っていた。やがて暴力事件を起こし逮捕されたのですが、面会日にやって来た母親がインタビューに応じました。「親として子どもが刑務所に入っているのはつらい事です。でも息子は変わったわ。以前のようにイライラしないし、自分の中に安らぎを持てるようになったんだと思います。息子は処分されるはずだった犬にチャンスを与えてあげた。そして息子も犬からチャンスをもったのよ」横でペットボトルの飲料を飲む息子を見ながら、涙ぐんで微笑んだ。

以前は自分の殻に閉じこもり、時が過ぎるのを待つのみだった受刑者たち。しかし、このプログラムのおかげで目標ができた。自分たちが育てた犬が人々の役に立つ。刑務所にながら、誰かの人生に犬を通じて必要とされていることが嬉しい。

犬と受刑者、お互いが再びやり直すチャンスを与えられるこのプロジェクト。

犯した罪や過ちなど、過去を消す事は出来ません。しかし  
私たちは、こんな自分でも誰かの役に立てると知った時、生きる活力が湧き、自信と誇りを持って1日1日を元気に過ごすことができます。

相手に与えること。相手の気持ちを理解しようとし、相手のために何かをしようと努力すること。

周りの人を幸せにすること。それは、誰かの役に立つことです。

先に紹介した兵庫県の300以上の中学で、100%導入されている、「トライやる・ウィーク」の5日間の職業体験プログラム。参加した生徒たちは、周りの人を幸せにすることの素晴らしさを体験を通して感じてゆきます。



(生徒：美容室)

**私**の今までの生活は、ただ勉強をして部活動をし、学校の規則を守って、友達と遊んでいるだけの生活だけど、仕事の世界は、まるで違いました。それは、今まで私がお客さんの立場でいたからです。いつも美容室に行くと、普通に話しかけてきてくれたり、やさしくてそして楽しくいつも会話がはずんでいました。しかし、実際にはお客さんことは、とてもむずかしくて大変でした。指導して下さる方もやっぱり陰では苦しいことをいっぱいしているんだなあと思いました。お客さんはカットやパーマをかけてもらいきれいになって、うれしそうに帰られる姿を見ていて嬉しく思いました。



(生徒：竹ぼうき製作)

一番印象に残ったことは、竹ぼうき製作です。もちろん竹ぼうき一本でもとても大変でしたが、うれしく思ったのは、その一生懸命作った不格好な竹ぼうきを、他の人が喜んで使ってくれることでした。人の喜びをみられたこともあって、達成感でいっぱいでした。この5日間が決して無駄にならないように、またこの5日間が、未来へ向かう滑走路を走るのに役立ってくれるよう、がんばっていきたいと思いました。そして感謝の気持ちをいつも持つておこうと思いました。自分の夢は自分で決め、自分のやり方で一生懸命進んでいきたいです。

(生徒：スーパー)

**お** 客さんでは入れない場所や実際にレジに立ってみたりすることは、働くということのおもしろさを感じた一面があったように思う。また、5日間に自分の知っている人たちが「がんばってるね」と声をかけてくれたことは、本当にうれしかったことを覚えている。

(生徒:病院)

**今**も印象に残っているのは、患者さんとのふれあい  
です。自分の手でおばあさんの足を洗うとき、こ  
んな強さでいいのだろうか、どんな話をすればい  
いのだろうか戸惑いましたが、「気持ちいいよ。ありがとうね。」  
と言うおばあさんの笑顔にほっとしたのを覚えています。車  
いすを押しながら中庭の散歩をした時も笑顔を見ることがで  
きてうれしかったです。

(受け入れ先:病院)

**入**院中の患者さんが、「トライやる・ウィーク」で参  
加してくださった生徒さんが来られるのを楽し  
みにしてしまして、最後のあいさつの時、涙し  
ておられました。私たちスタッフも、患者さんも、若い、力強  
い生徒さんの元気さと明るさをいただいたなあ、と思います。  
ありがとうございました。これからもがんばってください。

(保護者)

**お**かげさまで、とても有意義な5日間だったようです。ノート(活動日誌)を通して子供の素直な気持ちなど知ることができ、少しずつではありますが成長しているのかなと改めて気づくところがありました。本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。初日、のぼり旗を持って、子どもたちのがんばりを見られる楽しみを胸に、ワクワクした気持ちで事業所を回らせていただきました。制服を着用して一生懸命作業していました。真剣なまなざしで着々と作業を進めている顔、間違いのないように指導者の指示を聞く顔、不安なような緊張した顔、どの顔もいい顔でした。事業所の方もビデオを撮る間、手を止めて気にかけていただくだけでなく、笑顔で接していただき、保護者としてあたたかい対応に頭が下がりました。感謝の気持ちでいっぱいです。



「トライやる・ウィーク」シンポジウムでの記念講演から

平成19年11月12日(月) 玄田有史さん(東京大学教授)

しかられることもありますよね。私はすごく印象的だったのは、美容師さんになりたいと、一人美容院に受け入れてもらった中学生の話です。

一人でやってらっしゃる分だけ、忙しい。初日にも、やるのは掃除やタオルを出したりしまったりということ。ただ、全然判らないわけですから、早くとか、もっときれいに、としかられるわけです。厳しい。1日立っているのはきつい。しんどい。初日の月曜日はぐたっと8時ぐらいから寝てしまったりして。



やはり、さっきの子と一緒に、月、火、水、木、金とやっていくうちにできるようになるわけです。そうすると今度は言われる前に、ちゃんと掃除も髪の毛も掃いた。タオルも片付けた。

全部できるわけです。別にあれしろ、これしろ言われたい。  
ちょっと自信つけるんですね。

ちょっと欲が出ますよ。言われるまでに、自分から声をかけてみようかな。褒められるかな。「次、何しましょうか。」と言った。そのときには、お客さんが気っていて、その一人親方の美容師さんは、髪を切っていたというのです。「ちょっとまってて。」と言われた。ずっと待っていた。お客さんが帰られた後に、「自分から言ってきて偉いな」なんて言われるかと思ったら、反対にしかられるんです。



何でしかられなきゃならないのと思いながらしかられる。「私は美容師になってから、一つだけ自分で決めていることがある。お客様の髪の毛をカットしているとき、お客様にはさみを

当てているときには、私にとって真剣勝負なんだ。とても大事な真剣勝負なんだ。だからそのときは関係ないことをしゃべらないと決めている。お客様としか基本的には会話しないんだ。それを邪魔しないでほしい。」と言われた。

ショックを受けるんです。しかられた。その瞬間はショックです。しかし、途中から不思議なことがおこるんですね。うれしくなってくる。何か髪の毛をきれいにしている。かっこいい仕事だなと思ったけれども、それだけではない。自分がとっても大事にしてきたもの、これだけはまず守らなきゃ、これを守ればということを子供扱いせず、一人の人間として、一人の大人としてだめだと、しかられたのです。



うれしくなってくる。私も将来、こんな誇りを持った生き方ができるだろうかみたいなことを上手には言葉にはなりませんが、どこかにずっと持ち続けるでしょう。

(兵庫県教育委員会『地域に学ぶ「トライやる・ウィーク」  
—10年目の評価検証(報告)—』)

すでに50万人を超える体験者がある「トライやる・ウィーク」。実際に体験した生徒の9割以上が後輩にも勧めたいと回答し、時間が経った高校3年生となっても、8割は後輩に勧めたいと答えています。

参加した約8割が大人の優しさを感じ、感謝の気持ちを持つようになったと言います。9割以上が、コミュニケーションの大切さを知らされ、5割以上は、自分の決めたことに責任を持つようになったと、意識の変化を自覚しています。

さらに、不登校生の5割が全日程で参加し、参加者の4割は、その後登校率が上昇しているというのです。

受け入れ先の企業の7割以上が、生徒に大きな成長があったことを評価しています。

忙しい職場において、右も左もわからぬ中学生を受け入れることは、地元の企業にとって、利益にもつながらず、大きな負担になることは、間違いありません。

しかし、それを乗り越えるだけのものがあると皆さんが感じ、回を重ねるとごとに、その思いが確信へと変わっていったことが、地域の企業と学校、保護者が一体となり、この取り組みが15年以上継続される理由と思います。

職場に入り、初日は右も左もわからず、うろうろ落ち着きなく笑顔も挨拶もぎこちなかった中学2年生が、2日目、3日目と徐々に仕事を覚え、自分から仕事を見つけられるようになり、挨拶、動き、笑顔、声の張りが変わってくる。

3日目、4日目になると、生徒の顔つきに明らかな変化が見られることを、受け入れ先の企業も、学校も、保護者もはっきりと感じ、大人がまた、よい刺激を受けるといった意見が多く聞かれています。



「はたらく」とは、「傍(はた)を楽(らく)にする」こと。

周りの人を幸せにすることは、「施し」です。

お釈迦様の教えの中には「施し」の素晴らしさが教えられています。

「施す」のは、大変です。時間もかかります。体力も必要です。精神力や、様々な苦勞の要ることです。



キリスト教では、労働は神から与えられた懲罰であると言ったり、古来ギリシャでも、労働は奴隷の受け持ちであり、市民はその生産物を消費する存在と位置づけられるなど、「はたらく」ことが素晴らしい行いなのだという考えは、世界でも、あまり無いのかもしれませんが。

でも、周囲の人が、どうしたら幸せになれるかを考えること。  
それが、本来の「はたらく」行為でありましょう。

## 「施しは 生きる力の 元と知れ」

常に相手のことを考え、周りのことを考えて生きる人に、元  
気や活力が湧き、誇りや自信を持って生きてゆけるのです  
よと、お釈迦様は教えられました。

## 『慈悲蒔けば 愁苦の悩み 遁れ去る』

自分のことでいつもくよくよ悩み、落ち込んでしまう私達です  
が、他の誰かの幸せを思い、行動しようとしたとき、不思議と、  
元気と勇気が湧いてくることを、経験している人は、多いの  
ではないでしょうか。

「施し」には、私達を幸せにする素晴らしい働きがあるので  
す。

## 『呼べば呼ぶ 呼ばねば呼ばぬ 山彦ぞ まず笑顔せよ みな笑顔する』



布施の精神なんて無く、自分のことしか考えなかった私が、お釈迦様の教えによって布施の素晴らしさを知らされました。過去の私と同じ悩み苦しみを抱えている人の助けになればと思い、この小冊子を作りました・・・

でも、実は・・・

この小冊子で取り上げたことは、  
実は、まだこの問題の入り口でしかありません。

その根底には、更に大きな問題が横たわっています。

それこそ、私達が「本当の幸せ」になれる道です。

これから、そのお釈迦様の教えを学んでまいりましょう・・・